佐保川の薄ら氷

――天平勝宝八歳十一月二十三日の飲宴伝誦歌――

小伏志穂

萬葉集巻第二十に、天平勝宝八歳十一月二十三日、大伴池主宅での宴歌が収録されている。

二十三日に、式部少丞大伴宿禰池主が宅に集ひて飲宴する歌二首

初雪は　千重に降りしけ　恋しくの　多かる我は　見つつ偲はむ（四四七五）

奥山の　しきみが花の　名のごとや　しくしく君に　恋渡りなむ（四四七六）

右の二首、兵部大丞大原真人今城

智努女王の卒りにし後に、円方女王の悲傷して作る歌一首

夕霧に　千鳥の鳴きし　佐保道をば　荒しやしてむ　見るよしをなみ（四四七七）

大原桜井真人、佐保の川辺に行きし時に作る歌一首

佐保川に　凍り渡れる　薄ら氷の　薄き心を　我が思はなくに（四四七八）

藤原夫人の歌一首 佛母聖宮に天の下治めたまひし天皇の夫人なり。字は氷上大刀自といふ。

朝夕に　音のみし泣けば　焼き大刀の　利心も我は　思ひかねつも（四四七九）

恐きや　天の御門を　かけつれば　音のみし泣かゆ　朝夕にして〈作者未詳なり〉（四四八〇）

右の件の四首、伝へ読むは兵部大丞大原今城なり。

四四七五題に「飲宴する歌二首」とあり、四四七七番以下四首には題詞がないが、これも同じ宴での伝誦歌であろうことは、諸注の認めるところである。[1]

伝誦者大原今城は、萬葉集に八首の自作歌を残すとともに、飲宴の場において他人の歌を伝誦すること四回、自作の八首を超える十首の伝誦歌を残している。[2] 宴において伝誦歌を披露した人物としては、今城の他に大伴池主、久米広縄や中臣清麻呂など十三人の名が知られる。しかし、記録されている伝誦の機会は、池主が二回見られる他は、いずれも一回ずつで、彼らとの比較からも、他人の歌を伝誦することに深い関心があった今城の性格をうかがえよう。

宴の場で伝誦される古歌は、久米常民氏が指摘しているように、[3] 必ずその場に何らかの関連をもっているか、適合させた努力が見られるものである。久米氏が例として示した

我がやどの　花橘を　花ごめに　玉にそ我が貫く　待たば苦しみ（十七・三九九八）

は、第五句の「待たば苦しみ」という語が、この場（天平十九年四月二十六日の家持送別の宴）で響いているという。作者石川水通が橘への愛着をもって「待たば苦しみ」と歌ったのを、伝誦者池主が、長官の帰任を待つ思いに転じたのである。

先に掲げた天平勝宝八歳池主宅の宴における伝誦歌も同様に、その場に適う要素をもっていたと考えられる。小稿では、その大原今城伝誦歌四首のうち、とくに大原桜井真人作歌（四四七八）を、当日の場を踏まえて解釈し、この歌が当該飲宴でどのように機能し、出席者の心に響いたのかを、よみとってみたい。

一

まずはじめに、天平勝宝八歳十一月二十三日の池主宅での宴、という場について述べる。

当該歌群の大原今城伝誦歌四首について、『新潮日本古典集成』頭注は、

以上四首悲しい歌ばかりで、今城自身の四四七五～六の「恋」にも通ずる。何かを慰め合おうとするために持ち出したのであろうが、詳しい事情は不明。

とする。そしてこの「事情」を考察したのが影山尚之氏「万葉末期の哀傷歌――天平勝宝八歳池主宅の宴歌――」[4] である。影山氏は、四四七九・四四八〇番歌の二首が聖武天皇挽歌であったことを確認した上で、この宴の主題が聖武天皇追慕にあったと考え、伝誦歌の前二首が間接的に聖武を偲ぶもの、後二首が直接的に偲ぶものと捉えている。また、聖武追慕の契機となったものが「雪」であり、四四七五・四四七六番歌の大原今城の「恋」の相手も聖武であろうと指摘されている。

早く『萬葉集割記』も四四七八番歌注釈で、

此歌何ぞよせありて詠ぜる歟。端作計りの意にはあるべからず。

うすらひは氷の名と見えたり。此歌追悼の歌なるべし。奥二首も追悼也

と言っている。大原桜井作歌について、何か縁語の関係を以て句を連ねている様子のあること、題詞に述べる以外の事情がありそうなこと、そして続く二首とともに追悼の歌であろうと思われることを指摘したものである。

このように、当該飲宴の場において出席者が聖武を偲び、今城が追悼歌と思しき歌々を披露することになったであろうと推測することは、「天平勝宝八歳十一月二十三日」という日を思い遣れば、自然な流れとも言える。『続日本紀』・『萬葉集』によって、この年の出来事を確認してみよう。

二月　二日・橘諸兄、前年の失言により致仕／二十四日・聖武・光明・孝謙、難波行幸

三月　一日・聖武、難波堀江行幸／七日・河内国伎人郷の馬国人の家にて宴（四四五七～四四五九）

四月　十四日・聖武不豫につき大赦／十五日・平城宮還幸／二十日・家持依興作歌（四四六〇～四四六四）／二十二日・伊勢神宮へ幣帛奉納／二十九日・宇佐八幡宮へ幣帛奉納

五月　二日・伊勢神宮へ幣帛奉納、聖武太上天皇崩御、遺詔により道祖王立太子／三日・固関、葬儀のための御装束司など任命／四日・七大寺にて誦経／八日・初七日、七大寺にて誦経／十日・大伴古慈悲・淡海三船、朝廷を誹謗して禁固（十三日放免）／十五日・二七忌、七大寺にて誦経／十九日・佐保山陵に葬る／二十二日・三七忌、左右京の諸寺にて誦経／二十四日・鑑真・良弁を大僧都に任ず

六月　四日・五七忌、大安寺で設斎／八日・一年間殺生禁断の詔／十日・国分寺造営を催促する詔／十四日・六七忌、薬師寺で設斎／十七日・家持、喩族歌・修道歌・願寿歌（四四六五～四四七〇）／二十一日・七七忌、興福寺で設斎／二十二日・明年の国忌は東大寺で行うとの詔

十一月　五日・家持作歌（四四七一）／八日・安宿奈杙麻呂宅にて宴（四四七二・四四七三）、後日家持追和歌（四四七四）／十七日・諒闇中につき新嘗会を廃す／二十三日・池主宅にて宴（四四七五～四四八〇）

十二月　二十日・一周忌のための灌頂幡等を頒ち下す／三十日・皇太子らを遣わして、梵網経の講師を請わせる

以上のように、この一年は、二月に諸兄が致仕し、五月に聖武太上天皇が崩御してからは、その忌斎が続いた年であった。

池主宅での宴が催された十一月二十三日は、聖武の諒闇中という

理由で廃された新嘗会の数日後にあたる。また、聖武在位中の『続紀』[5]記事によれば、十一月には

巳丑、天皇大安殿に御しまして、冬至の賀辞を受けたまふ。親王と侍臣らとは、奇翫珍贄を奉持して進る。即ち文武百寮五位已上と、諸司長官・大学博士らとを引して、宴飲すること終日、楽を極めて罷む。（神亀二年）

巳亥、天皇、中宮に御します。太政官と八省と、各、表を上りて、皇子の誕育せるを賀ひ奉りて、并せて玩好物を献る。是の日、宴を文武の百寮已下、使部に至るまでに、朝堂に賜ふ。（神亀四年）

乙巳、冬至なり。南苑に御しまして、親王已下、五位已上を宴したまふ。（神亀五年）

庚戌、冬至なり。天皇、南樹苑に御しまして、五位已上を宴し銭を賜ふ。（天平三年）

丙寅、冬至なり。天皇、南苑に御しまして群臣を宴したまふ。（天平四年）

壬辰、群臣を中宮に宴す。（天平九年）

戊申、群臣を内裏に宴す。（天平十五年）

と、冬至の賀などの宴が設けられていたようである。池主宅の宴があった十一月二十三日は、冬至の翌々日にあたっている。[6]

このようなことから、聖武崩御後すでに半年を経た十一月になって、もし存命であったならば今ごろは新嘗会もあり、もっと違った気分での宴となったであろうにと、聖武追慕の思いを新たにしたのではないだろうか。翌十二月には、一周忌のための灌頂幡等を頒ち下したり、皇太子らによる追善法要をとりおこなったりと、国忌に向けての準備が続いている。

二

右に見たように、当該飲宴の出席者に聖武追慕の思いが沸き上がっていたであろうことを前提にして、披露された歌々を改めて一読しよう。

「聖武追慕」を念頭におくと、四四七五・四四七六番歌の「恋」の対象は、前掲彫山論文の指摘にもある通り、もちろんこの場にいない亡き聖武太上天皇ということになる。四四七七番歌は、題詞に言うように、もとは智努女王の死に際して円方女王が作歌したものである。しかしこの場で「佐保道をば　荒しやしてむ　見るよしをなみ」と誦詠するとき、聴衆の心には、今は佐保山陵に眠る太上天皇と、その佐保にゆかりの人が失われたことで荒れてゆく佐保道の様子が浮かんだであろう。そして四四七九・四四八〇番歌では「朝夕に音のみし泣」く、「天の御門を　かけつれば音のみし泣か」れ

ると、天皇を失った悲嘆が歌われており、同席した人々の気持ちを的確に代弁することに成功したものと思われる。

では、四四七八番歌はどうだろうか。当然、歌い出しの「佐保」の地名が聖武ゆかりのものである点が、指摘できる。この歌は、諸注釈書が指摘するように佐保の地にゆかりの恋歌とみられ、聖武を慕う人々の心に寄り添い得る。しかし、「佐保」という地は、大宮人なら誰もが親しむ所であり、ひとり聖武のみに特別関係が深いものではない。直前の四四七七番歌は、その「佐保」が、「見るよし」がないので「荒」れるだろうかと歌っているところに、大切な人を喪失した嘆きがよみとれ、聖武追悼の意を表出できているのである。四四七八番歌が「佐保にゆかりの恋歌」であるというだけで、あとは場の力を借りて、亡くなった聖武への思いと結び付き得ると考えるのは、あまりに関係が弱すぎるのではないだろうか。

以下、四四七八番歌について「佐保」以外の語句を検討し、この歌が聖武追悼歌群に加わり得た、より積極的な理由を模索する。

三―① 作者と作歌年代

四四七八番歌作者大原桜井真人は、長皇子の孫桜井王で、天平十一年、兄高安王らと共に大原真人の姓を賜っている。和銅七年に无位から従五位下、とあるのを蔭位によるものとしてこの年二十一歳とすると、天平勝宝八歳には六十三歳となり、存命の可能性はある。よって当該歌の作歌時期の上限は天平十一年、下限は天平勝宝八歳と考えられる。この期間、前半は都が定まらず彷徨した時期で、後半は盧舎那仏開眼はあったものの聖武の不豫が続いた。

三―② 「我が思はなくに」

当該歌作者が心情を吐露しているのは、終句「我が思はなくに」の部分である。

「我が思はなくに」の例は、当該歌の他に集中二十五例ある。このうち雑歌の部立てにあるものが三首、他は巻第四や十一・十二など相聞である。

当該歌と同じ「〇〇心（を）　我が思はなくに」の形をとるものが、九例見られる。

うちひさす　宮にはあれど　月草の　うつろふ心　我が思はなくに（十二・三〇五八／寄物陳思）

谷狭み　峰に延ひたる　玉葛　絶えむの心　我が思はなくに（十四・三五〇七／未勘国相聞往来歌）

あらたまの　年の緒長く　逢はざれど　異しき心を　我が思はなくに（十五・三七七五／中臣宅守）

など、不誠実な心を「我が思はなくに」と歌い、心底相手を思って

いることを表している。当該歌もこれらの類型にあてはまるもので、題詞には明示されていないが、やはり相聞的な心持ちの察せられる歌である。『萬葉集評釋（窪田）』に

佐保川の当たりにある女の許へ、冬の寒い夜通って行き、途中見て来た薄氷を捉えて序とし、心の真実を誓った歌である。

と言われるように佐保の地にゆかりのある恋歌と見るのが自然で、ここでは、その恋心は「薄き心」といった不誠実な気持ちではないと歌っている。

三―③「薄き心」

「心」を「薄し」という萬葉歌は、他に見られないが、

右、伝へて云はく、時に幸びられし娘子あり姓を未詳なり寵の薄れたる後に、寄物陳にかたみといふを還し賜ふ。ここに娘子怨恨みて、聊かにこの歌を作りて献上る、といふ。（十六・三八〇九左）

右の一首、藤原宿奈麻呂朝臣の妻石川女郎、愛を薄くし離別せられ、悲しび恨みて作る歌なり。年月未詳なり（二十・四四九一左）

と、「寵」や「愛」が薄れるとの表現がある。男女の間の気持ちが冷めることを表す集中例である。

同様の表現は漢詩文の中に見え、

身を寄する遠きに在りと雖も、豈に君を忘れて須臾せんや。既に厚しとして薄しと為ず。（『玉台新詠』[8]一、徐幹「室思一首」六章）

誰か言ふ去婦は薄しと、去婦は情更に重し。（『玉台新詠』二、劉勳妻王宋「雑詩二首」其二）

のように萬葉集中に見られた「寵薄」「薄愛」と同じく、男女間の恋情の厚薄に関するものがある。また

始め大津皇子と、莫逆の契を為しつ。津の逆を謀るに及びて、島則ち變を告ぐ。朝廷其の忠正を嘉みすれど、朋友其の才情を薄みす。議する者未だ厚薄を詳らかにせず。（『懐風藻』[9]河島皇子伝）

と、恋情とは関係なく薄情であることを表現したものや、

方に今、人の情稍薄くして、釈教陵遲すること、独り近江のみに非ず、餘国も亦爾り。（『続日本紀』元正・霊亀二年五月）

と、仏教に対する人々の信仰が薄く、次第に衰えてきたと上奏する場面での使用も見出せる。

「薄き心」という語は、このような漢文中に見られる表現の翻案的なものと思われ、巻八に雁信の故事にかかわる歌を残し[10]、また天平年間に「風流侍従」であったと伝えられる[11]作者、大原桜井真人ならではの歌いぶりと言えよう。

この相聞的な歌がこの日の宴で誦詠されるとき、そこに詠出され

る「我」の誠実な心とは、もちろん聖武太上天皇に対する思いである。

三―④　佐保川の薄ら氷

そしてこの「薄き心」は、「佐保川に　凍り渡れる　薄ら氷の」という序によって導かれている。「薄ら氷のように」とは、どのように薄いということであろうか。

「或本、藤原京より寧楽宮に遷る時の歌」（一・七九）に

…あをによし　奈良の京の　佐保川に　い行き至りて　我が寝たる　衣の上ゆ　朝月夜　さやかに見れば　たへのほに　夜の霜降り　石床と　川の氷凝り　寒き夜を　息むことなく　通ひつつ　造れる家に　千代までに　いませ大君よ　我も通はむ

とある。寒さの厳しい夜には、川に氷が張り詰めることもあったと分かる。

また、集中で氷あるいは凍ることを歌った例は、他に

…さ夜更けて　あらしの吹けば　立ち待てる　我が衣手に　降る雪は　凍り渡りぬ　今更に　君来まさめや　さな葛　後も逢はむと　慰むる　心を持ちて…（十三・三二八〇）

と、これの或本歌

…さ夜更くと　あらしの吹けば　立ち待つに　我が衣手に置く霜も　氷にさえ凍り　降る雪も　凍り渡りぬ　今更に　君来まさめや…（十三・三二八一）

が見られる。降る雪が一面に凍てついた、こんな寒い夜にいまさら君がいらっしゃるだろうか、と歌う。

「薄ら氷」の集中使用例は見られないが、以上のような歌を参考にすれば、「佐保川に凍り渡れる　薄ら氷」という表現は、女のもとへ通う道すがら、厳しい冷え込みで薄い氷の張っている佐保川を目にしてのものであろうことが確認できる。作者は、この佐保川の実景をもとにした同音序で「薄き心」を導き、そこに「薄ら氷」の薄くて割れやすく冷たいイメージを背負わせているようである。

しかし、以上のようにみただけでは、聖武太上天皇を追慕するにふさわしい歌として択ばれるほどの、積極的な根拠が感じられない。そこで、続いて「薄ら氷の　薄き心」という、集中では他に見られない独自の表現を、さらに検討してみよう。

先に、「薄き心」について、漢文中に見られる表現で、作者大原桜井らしいものと述べたが、「薄ら氷」もまた、集中例がないにもかかわらず、漢籍での使用例が指摘できる語である。

A　敢えて暴虎せず　敢えて馮河せず　人其の一を知って　其の他を知る莫し　戰戰兢兢として　深淵に臨むが如く　薄氷を

B 履むが如し（『詩経』[14] 小雅・小旻）
温温たる恭人は　木に集るが如し　惴惴たる小人は　谷に臨むが如し　戰戰兢兢として　薄氷を履むが如し（『詩経』小雅・小宛）

C 曾子疾有り、門弟子を召して曰く、予が足を啓け、予が手を啓け。詩に云ふ、戰戰兢兢として、深淵に臨むが如く、薄氷を履むが如しと。而今而後、吾免るるを知るかな。小子と。（『論語』[15] 八、泰伯）

D 然る後能く其の社稷を保つて、其の民人を和す。蓋し諸侯の孝なり。詩に云ふ、戰戰兢兢として、深淵に臨むが如く、薄氷を履むが如し。（『孝経』[16] 三、諸侯章）

E 臧文仲曰く、「國に小無し、易る可からざるなり。備へ無くば、衆と雖も恃む可からざるなり。詩に曰く、『戰戰兢兢として、深淵に臨むが如く、薄氷を履むが如し』と。（『春秋左氏伝』[17] 僖公二十二年）

F 詩に曰く『戰戰兢兢として、深淵に臨むが如く、薄氷を履むが如し』とは、善人、上に在ればなり。善人、上に在れば、則ち國に幸民無し。（『春秋左氏伝』宣公十六年）

G 成王、政を尹佚に問ひて曰く、吾何の徳をか之行ひて、民、其の上に親まん、と。對へて曰く、之を使ふに時を以てして之を敬順せよ、と。王曰く、其の度は安に至るや、と。曰く、深淵に臨むが如く、薄氷を履むが如し、と。（『淮南子』[18] 十二、道応訓）

H 君子の民の上に居るは、腐索を以て奔馬を御するが若く、薄氷を蹍みて蛟、其の下に在るが若く、林に入りて乳虎に遇ふが若し。（『淮南子』十七、説林訓）

I 職を越えて法を踰えて、以て名誉を取る、譬へば猶薄氷を踐みて、以て白日を待つがごとし。（『漢書』[19] 八、宣帝紀）

J 朝菌の桑無きに大椿の蔭を望むは、薄氷を蹈みて以て夏日を待ち、…に似たり。（『抱朴子』[20] 外篇一、嘉遯）

K 誠に、能く事、倹なるに過ごし、深きに臨み冰を履み、安きに居りて奔れるに乗ずるの戒めを忘れず、…謀夫は思いを協せて、其の長籌を進むれば、則ち人王は…猶お以て垂拱して賢に任じ、枕を高くして以て成るを貢む可からん。（『抱朴子』外篇五、君道）

L 躬を倹にし志を約にすること、薄氷に策奔るが若きなり。（『抱朴子』外篇六、臣節）

M 王者は上に憂勞し台鼎は下に墾顧し、深に臨み薄を履みて、禍の及ばんことを懼る。（『抱朴子』外篇四十八、詰鮑）

N 銅史は刻を司り、金徒は箭を抱く。薄を履めども兢るるに非

ず、深に臨めども戦く罔し。（『文選』[19]五十六、陸佐公「新刻漏銘」）

Aは、「戦戦兢兢として畏れ慎み、深い淵に臨んで落ち込むことを畏れるが如く、薄い氷を踏んで水中に陥ることを恐れるが如くである。」の意で、C以下、いずれもこの『詩経』の句を引用したものである。「如履薄氷」は、鄭箋に「恐陥也」とある。

大原桜井作歌は、「薄氷を履む」とは言っていないが、『続紀』宝亀三年二月の記事に、文屋大市が致仕を乞う上奏があり、

臣、愚質を以て幸に聖朝に逢ふ。紫を拖き金を懐きて、叨に喉舌を掌り、栄を貪り貫を負みて、戦きて薄深を過ぐ。

と、「薄」「深」だけで「如履薄氷」「如臨深淵」をふまえたと考えられる表現が認められる。『詩経』の成句がこれほど知られていたのであれば、「薄氷」のみでも、「それを踏んで水中に陥るのを恐れる」意を暗示することが可能であると推察できよう。

よって四四七八番歌の「佐保川に凍り渡った薄ら氷のように薄い心」とは、「踏み割って川に陥るのを恐れるような薄情な心」の意であろう。この歌は、

安積山　影さへ見ゆる　山の井の　浅き心を　我が思はなくに

（十六・三八〇七）

の類歌であるとの指摘が多い[20]。しかし、「薄ら氷の　薄き心」は、浅くうすっぺらい薄情さを言うのではなく、深く陥るかも知れないことに恐れ戦いてその恋に躊躇してしまうような薄情さを、示したものと思われるのである。

それでは、この歌が聖武太上天皇を追悼する歌群におかれたとき、その誦詠の聴衆の心に浮かんだものは何であったろうか。

いま一度、先に掲げたA～Nの「薄氷」使用例を見る。Dは、諸侯の守るべき孝を述べた章で『詩』を引用している。Eでは、臧文仲が王に対して「相手が小国といえども侮らず、慎んで十分な備えを以て対処して下さい」と申し出るところで、『詩』にもこのように言われています、と引用している。同じく『左伝』のFでは、『詩』の「戦戦兢兢として深い淵に…」とは善人が上に立っていることで、そうであれば国には欲深い人民がなくなるという。Gでは、尹佚が周の成王に政を問われ、「民を使役するには、深淵に臨むが如く、薄氷を履むが如くに戒慎されるように」と答えている。Hには、君子が民の上にいることは、薄氷を踏んでその下に蛟がいるようなもので、いつも緊張しているのだとある。少し句が異なるが、「薄氷を履む」ことを民の上にいる君子の有り様と結び付けている。Kは、君主がよく倹約し、薄氷を踏むように慎むこと等を忘れなければ、賢人に任せて自分は手を拱いていてもうまく治まる、と述べる。これらの例では、「薄氷を踏んで陥るのを恐れるように慎み深

くあること」は、人の上に立つ者が心に留めておかねばならない条件の一つとして挙げられている。

そして奈良朝の天皇もまた、その「薄氷の戒め」を意識していたようである。聖武の大赦の詔に

O　朕八荒に君として臨み、万姓を奄ひ有つ。薄きを履み朽ちたるを馭め、情覆育に深し。衣を求め寝ぬるを忘れ、切りに納隍を思ふ。（天平十二年六月）

という。孝謙天皇の改元の詔には

P　朕、寡薄を以て、忝くも洪基を継ぎ、八方に君として臨みて、茲に九載。曾て善政無く、日夜憂へ思ふ。危うきこと淵に臨めるが若く、慎むこと氷を履めるが如し。（天平宝字元年八月）

とあり、また称徳時代には、

Q　朕、重任を荷ひ負ひて、薄きを履み深きに臨めり。（宝亀元年七月）

といい、そのように慎んでいても疫病災異が止まないとして、大般若教を転読させている。

また、詔勅以外では、藤原仲麻呂の、鎌足の功田を施入して維摩会の復興を請う上表に

R　天恩、曲に垂れて、儻し臣が見を允したまはば、請ふ、主者に下して、早に施行せしめむことを。微願に任へずして、軽しく聖聴を煩す。戦々兢々として、深きに臨み薄きを履む。（天平宝字元年閏八月）

とあり、先に引用した文屋大市が致仕を乞う上奏にも見られた。

この他、「深淵」「薄氷」の部分は省略されているが、聖武の、災異を除くことを願う詔に

S　朕寡薄を以て景図に嗣ぎ膺り、戦々兢々として、夕に惕若として厲み、一物の所を失ふことを懼りて、懐生の便安ならむことを情睠るに、…（神亀二年九月）

と、『詩経』の同じ部分を下敷きにした表現が見出せる。

以上、人の上に立つ者の戒めとして「薄氷を履んで陥るのを恐れるが如き慎み深さ」があったと確認できた。この戒めは、P・Sでは天皇自らの「自分は徳も薄いのにこの位についている」という憂いに続いている。とくに聖武は、白亀出現を機に即位した天皇である。元正の詔は、次のようであった。

熊氏が瑞応図に曰はく、『王者偏せず党せず、耆老を尊び用ゐ、故旧を失はず、徳沢流洽するときは、霊亀出づ』といふ。（養老七年十月）

うつくしくも、皇朕が御世に当りて、顕見るる物には在らじ。（神亀元年二月）

天子の徳が洽くゆきわたるときに白亀は出現し、それは元正の御世を寿いでのことではなく、聖武の治世を記念したものなのである。しかし、このように有徳の天子であることを保証されている聖武なのに、再三自らの薄徳を嘆き、国分寺建立・大仏発願・大赦などをおこなっている。

このような聖武を喪った悲しみを表出する歌群において、「佐保川に　凍り渡れる　薄ら氷の」と詠されるとき、君主の徳にかかわる「薄氷」という語は、天皇を思い出すよすがとしての役割を果たし得たのではないだろうか。

以上、「薄ら氷の　薄き心」という集中には他に見られない語が漢詩文には散見することを手掛かりに、四四七八番歌をよんだ。その語には、天平勝宝八歳十一月二十三日という聖武追慕の思いが高まった日の宴で詠される歌の中にあって、同様に亡き太上天皇を慕うものとして機能し得る背景があった。宴の出席者は、「薄ら氷」という和歌には使われにくい語がわざわざ用いられたことによって、薄氷を踏む思いで治世にあたった聖武の姿を思い描いたであろう。

また、作者大原桜井真人は聖武に近しい人々のうちのひとりである。[11]そのことから、あるいは、当該歌がもともと聖武を偲んで作られたものであった可能性も、全く否定されるものではないとも思われる。

〔注〕

① 「是モ池主ニテノ宴ノ時ナルヘシ」（『萬葉代匠記・精撰本』）など。

② 今城の伝承歌はすべて巻第二十所収で、当該歌群の四首の他に、四四三六～四四三九の四首、また四四五九（この歌は、別の機会に池主によっても伝誦されている。）、四四八二が見られる。

③ 『萬葉集の誦詠歌』（昭和三十六年七月十日／岩波書店）

④ 「上代文学」（七十一号／平成五年十一月）

⑤ 引用は、新日本古典文学大系（岩波書店）に拠る。

⑥ 『日本暦日便覧　上』（汲古書院）に拠ると、この年は十一月二十一日が冬至である。

⑦ 「これは思ふ人のもとに、佐保邊を經て、通ひ給ふほどに、よみたまへるなるべし」（『萬葉集古義』）など。

⑧ 引用は、新釈漢文大系（明治書院）に拠る。

⑨ 引用は、日本古典文学大系『懐風藻　文華秀麗集　本朝文粋』（岩波書店）に拠る。

⑩ 遠江守桜井王、天皇に奉る歌一首

九月の　その初雁の　便りにも　思ふ心は　聞こえ来ぬかも（八・一六一四）

⑪『家伝』に

風流なる侍従は、六人部王・長田王・門部王・狭井王・桜井王・石川朝臣君子・安倍朝臣安麻呂・置始工等十余人あり。

とある。（引用は、日本思想大系『古代政治社会思想』（岩波書店）に拠る）

⑫引用は、漢詩大系（集英社）に拠る。

⑬注⑧に同じ。

⑭注⑧に同じ。

⑮引用は、全釈漢文大系（集英社）に拠る。

⑯注⑧に同じ。

⑰引用は、和刻本正史『漢書（一）』（汲古書院）に拠る。

⑱引用は、御手洗勝氏『抱朴子外篇簡注』（広島大学文学部中国哲学研究室）に拠る。

⑲注⑮に同じ。

⑳「もとより巻十六の安積山影副見山井之淺心乎吾念莫國（アサカヤマカゲサヘミユルヤマノキノアサキコロロヲワガモハナクニ）（三八〇七）に倣った作なることは言ふまでもない。」（『萬葉集全釋』）など。

㉑巻第八に、桜井王が遠江守時代に聖武天皇に奉った歌（一六一四、注⑩参照）と天皇の報和歌（一六一五）が見られる。

なお、萬葉集の引用は、すべて新編日本古典文学全集（小学館）に拠った。

（こぶせ　しほ／本学非常勤講師）